アカデミックな「子ども期」理解

Childhood

わたしたちが「おとな」と区別するところの「こども」に対する見方は、社会の発展とともに変化してきたものであって、過去においては、「こども」の認識において「いま」とは違うものであった。

「こども」については、こども表記（➔#006）でも述べるが、人格や人権を意識した「個」として捉えられてこなかった歴史がある。親と子の一対一対応を除いて、家族を含む社会で「こども」は「個」として認められなかった。

ギル・ヴァレンタイン『子どもの〔遊び・自立〕と〔公共空間〕Public Space and the Culture of Childhood』（明石書店 2009年）に 記されている「子ども期 Childhood」を以下に引用する。

p10 //子ども期の歴史と、親－子ども関係はともに複雑であり、矛盾を含んでいる。アリエス（おそらく最も有名な子どもの歴史家である）は、中世の頃には、子どもは年齢によって社会的に（大人から）区別された存在というより、むしろ小さな大人と見られており、そのため大人と子どもの間には特別な違いは何もなかったと論じている。

p10 //子どもが大人とは別のものとみなされ始めたのは16世紀になってからのことであり、人間の一段階としての子どもという考え方がわたしたちの社会的想像力において支配的になってきたのは、啓蒙時代〔17世紀後半から18世紀〕以降のことである。//

本田和子『異文化としての子ども』ちくま学芸文庫 1992年

⬅ p16 アリエス『〈子供〉の誕生』について

//現在、私どもに自明と思われている「子ども」なるものが、たかだか18世紀以降の歴史的な観念であるとは、最近しばしば話題とされているところである。アリエスの大著『〈子ども〉の誕生』の訳出が、恐らくはきっかけの一つを提供したのであろう。彼は、アンシャン・レジーム期のフランス社会における「小さい人々」の生活を様々に洗い出すことを通じて、「子ども」および「子ども期」という観念が、近代的な家族の形成に伴って出現する、一種の近代的「制度」であったことを明らかにしている。//

17世紀……悪魔である
（ディオニソス的な子ども観）

p11 //子どもは原罪を引き継いだもの、つまり動物に似た本能－野性を持ったもの//……//子どもを小さな野蛮人、もしくは悪魔とみなす考え方で、生まれつき乱暴で手がかかる//……//生得的に罪深いものだが、親の不断の確固たる努力によって回復しうる//

17世紀末……天使である（アポロ的な子ども観）

p11 //生まれつき善性を持っているのに、//……//社会によって台無しにさせられてしまう//……//良心や社会的ふるまいへと向かう基礎となるものとして、生得的な「共感」や「善意」といった原理を前提にしている//……//これはアポロ的な子ども観である。//

18世紀……無垢さの理想化

p12 //生まれつきの無垢さが、〔ワーズワースら〕作家、詩人によって、かなり理想化されて描かれた。//……（「子ども期」を共感をもって情緒的に描写したとするルソー『エミール』の例に続き）……//子どもを危険視していた暗黒時代から、啓蒙的関心の時代への転換//

18世紀後半……「好意的」に対して反動が起きる

p12 //ヨーロッパで革命が起こり、不安定さが増すにつれて、//……//悪にまみれた社会によって、子どもの善が侵されてしまうという考え方が、徐々に、そして断片的に、支配的な考え方として現れてきた//

19世紀……「子ども期」の発生

（子どもを教育の対象とする考え方が拡がってきたのだが）p12 //工場における児童労働力の容赦ない搾取を特徴とした産業資本主義が併存//…… p13//児童労働に何らかの規制を設けようとする関心を、中産階級の改革論者たちの間にもたらした//……（子どもを労働から守るという観点に加え、秩序・時間厳守・道徳という管理優先として）//教育は、それを通じて成人性を達成することができる基本的プロセスとなり、成人期への移行を示す基準となった//（ここに、**子ども期が発生する**）……//子ども期を大人が負っている責任とは隔たりのある特別な時期だと考えるようになった転換を示すものであったということである。//

…… p14//子ども期を送れなかったそれら〔労働者階級〕の子どもが、子ども期をまっとうした〔中産階級の〕子どもに対する脅威となることが最も懸念された//（教育というシステムが社会の分断を生んだ）

無垢や純粋で思うこと

「子ども」の見方が現在と異なっていた頃、子どもの権利や人格に認識が乏しかった頃、小さな大人としか見なかった頃は無邪気なふるまいやそのさまを見て、無垢や純粋をあてはめたのかもしれない。

ここでの「子ども（期）」は西欧におけるキリスト教の社会思想かもしれない。だから、それらの域外では、無垢や純粋に含まれる意味あいは異なるかもしれない

いや、現代においても、子どもに当事者意識が薄ければ、無垢や純粋の意識になる人はいるだろう。

19世紀後半～20世紀初め……「子ども期」の大衆化・普遍性（成立）

p15 //法の整備と、より決定的には大衆教育の考案（さらに後には、国民健康保険制度）によって、神話的な状況としての子ども期という考え方が大衆化し、子ども期に関する普遍的な見方が徐々に現れてきた、とヘンドリックは論じている//

子どもは、死ななくなった

19世紀～

本田和子（ほんだ・ますこ）

『子ども100年のエポック』

フレーベル館 2000年 p61

//ジェンナー（1749-1823）による種痘法の発見を契機として、疱瘡（ほうそう）は「死病」であることを止めた。しかも、それは、単に先進国だけの問題ではなく、1958年以来の世界保健機構による「天然痘根絶計画」の結果、1980年には、「天然痘根絶宣言」が出されてもいる。わが国の場合は、幕末に輸入された種痘は、先覚的な医師たちによって啓蒙活動が続けられてきた。しかし、明治時代の罹患者に対する強制隔離措置が社会問題となるなど、紆余曲折もあって、明治年間には、1万人前後の死者が出た大流行が4回も記録されている。種痘が普及し、疱瘡が子どもたちの生死を司る祟り神の座を降りたのは、20世紀に入ってからだったのである。いま、私たちの視界から、「疱瘡」も「種痘」も姿を消し、それどころか、乳幼児病のリストから従来の馴染みの病名が消えて、彼らが進歩した医学・医療のもと、死から解放された存在へと変わったことが示されている。//……//「子ども」という存在が、多産多死の「周縁的存在」でなくなり、少産少死の「中心的希少価値存在」へと変わったことを意味している。//

※子ども自身は「大きくなったら何になる・なりたい」夢を持ち、子どもは学費など親の投資対象になった。生命保険をかけたりもする。得ることの喜び、失うことの悲しみはいずれにおいても拡大した。

ニール・ポストマン

『子どもは もういない』

新樹社 2001年

衝撃的なタイトルである。以下、小柴一（訳者）による。

p6 //中世には子どもがいなかったと聞いて、驚いたことのある方も少なくないと思う。当時は、大人と子ども（7歳～17歳）との区別がなく、子どもは7歳になれば、大人の仲間入りをした。子ども期は、歴史の一時期につくりだされ、現在消滅しつつある社会的観念である。//

本書は2部構成で、①「つくられた子ども期」 ②「子ども期の消滅」となっている。//1章で、まず古代・中世にはなぜ子どもがいなかったが検討され、//……以下、解題される。

詳細は本書を読んでいただくしかないが、グーテンベルクの活版印刷技術発明によって知識の伝播が可能になった（15世紀）

これによって「教育」も可能となり子ども期が成立する要因となった。

時代は一気に下って今日、//電信からテレビ、コンピュータなど新しいメディアの性格が大人の秘密をなくし、大人と子どもの境界をとりはらう//……ということによって、子ども期が消滅したとしている。

江戸、明治、そして「いま」

藤田覚『幕末から維新へ』岩波新書 p115
//「日本の教育は、ヨーロッパの最も文明化された国民と同じくらいよく普及している」「だから日本には、少なくとも日本文字と中国文字で構成された自国語を読み書き出来ない男女はいない」// ※ドイツのシュリーマン（1822～90）が、1865年（慶応元年）に//横浜に上陸し、江戸や八王子での見聞を『日本中国旅行記』//に記している。

およそだが、江戸期（半ばより）において、日本の子どもは幸せだった。おとなは子どもの面倒をみることに尽くした。しかし、明治期になって、政府や権力者は子どもに関心がなかった。それは、残念ながら今に続いている。
明治政府は西欧にならって法整備を行ったが、よく知られているように富国強兵が柱だった。つまり、国民国家が建国方針だった。

//〔17世紀初めから続いた徳川時代は19世紀半ばまで続いた〕260年余という期間を、「封建制」という一言で片づけてしまうことに無理がある気がする。//（柿崎明二『「江戸の選挙」から民主主義を考える』岩波書店 p65）。事実、江戸時代については見直しが進み、江戸後期、百姓は武士支配から賢明に自立の道を進んでいたと分析されている。村の支配者・知識者レベルの史料は多くあるのだが、子どもの暮らしが見えない。農民（おとな）の子ども時代があったはずで、利発な子どもだったから、知的なおとなになったのだろうと想像したい。

しかし、明治政府は誤り、国民皆兵に進んだ。第二次世界大戦の敗戦後は経済復興、産業優先だった。
それでも、「子ども期」は敗戦後しばらくは江戸期の系譜をひいていたが、高度経済成長期の終焉とともに、子どもの遊びは著しく衰退し、1980年～1990年にかけて、あるいは以降、かつての「子ども期」と言える状況ではなくなっている。「子ども（期）」は、偶然の産物ではなく、人類が生み育て上げたのである。